

Nakai var. *roseoviridis* (Kitagawa) Kitagawa in l. c. 6: 120 (1942).

Hab. Manchuria.

3 d. var. *koreensis* (Nakai) I. Ito, stat. nov.—*Polygonum koreense* Nakai in Bot. Mag. Tokyo 33: 6 (1919)—*Persicaria koreensis* (Nakai) Nakai in Rigakukai 24: 300 (1926)—*Persicaria sungareensis* Kitagawa in Journ. Jap. Bot. 19: 62 (1943).

Hab. Korea, Manchuria.

○ヒメヘビイチゴに就て 檜山庫三: Kōzō HIYAMA: On *Potentilla centigrana* Maxim.

Maximowicz が *Potentilla centigrana* を書いた時には之を2つの変種に分かつたが、葉の大小とか・鋸齒の具合・萼片と副萼片との形や大きさの関係などに雑然とした変化があつて到底それらによつて型を区別することはできないために、M氏の区別はあまり行われずに来た。が、しかし、M氏の言及しなかつた毛の性質に2通りがあつて、これによつてヒメヘビイチゴに2つの型を認めることができる。つまり産地によつて茎や葉柄の毛に開出するものと伏臥するものとの2つがあるのである。この毛の多少にはいろいろの程度が見られるが、概していえば立毛型では茎の基から多毛なものが多く、また伏毛型では茎の下部が無毛で中部あたりから先に毛を散生するものが多い。日本には立毛型が多いが、北海道や本州には伏毛型も見られる。*Potentilla centigrana* というものは記載によると茎は“parce adpresse setulosa”であつて、その基本植物は伏毛型であることが判るのであるが、日本ではじめてヒメヘビイチゴという和名がつけられた当時には毛のことなどは問題にしていなかつたであらうから、ヒメヘビイチゴという名は日本の普通品である立毛型の方に残すことは差支えないと思う。そこで伏毛型の方にも和名が欲しくなつてくるが、これにはカラヒメイチゴ(カラヘビイチゴ、カラヒメヘビイチゴ)という名が既にある。というのは、この和名は中井猛之進氏(1914年)の命名で、はじめ朝鮮・満洲の植物に対して与えられたものであつて(学名には *P. centigrana* var. *mandshurica* が使われた)、私の見た彼地の標品はM氏のいうようにどれも伏毛品であつたからである。しかし、この名に何か故障でもあるようなら、フシゲヒメヘビイチゴと新称したらよいと思う。初めこの毛のことに気付いた時に私はM氏の記載に照して高毛型の方を仮にタチゲヒメヘビイチゴと呼んでおいたのであつたが、これは穩当でないので捨てる。さて、そこで普通のヒメヘビイチゴを新たな一品種(*Potentilla centigrana* f. *patens* Hiyama)と見て次のように記載しておきたい。

Potentilla centigrana Maxim., in Bull. Acad. Imp. Sci. St.-Petersb. 19: 163 (1873) cum var.

forma **centigrana**—Nom. Jap. Tō-himehebiichigo, Tō-hebiishigo, Tō-himeichigo.

forma **patens** Hiyama, nov. f.

Caules petiolique patenter pubescentes. Cetera ut in typo.—Nom. Jap. Himehebiichigo.

Hab. Hondo: Shimura, Tokyo, Prov. Musashi (Hiyama—May 14, 1933—typus in herb. Nation. Sci. Mus. Tokyo). (東京都文京区雑司ヶ谷町)